

宮本百合子選集

6

道 標

•
第三部

宮本百合子選集

6

道

標

第三部

河出書房

宮本百合子選集

6

道標第三部

第8回配本

昭和三十一年十一月二十五日 印刷
昭和三十一年十一月三十日 發行

定價二五〇圓
地方價 二六〇圓

著者 宮本百合子

發行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 山元正宜
東京都文京區柳町二六

發行所

株式會社

河出書房

東京都千代田區神田小川町三ノ八
振替口座東京一〇八〇二番
電話(29)三七二二番(代表)

印刷・三晃印刷KK

製本・美行製本所

目次

道	標	第三部		一
第一章		三		
第二章		六		
第三章		一三		
第四章		二二		
解題		三〇		

道

標

第三部

第一章

一

毎晩七時に、リオン停車場からマルセーユ行の列車が出る。その列車でパリを立つと、翌朝七時に、マルセーユに着く。五月二十日ごろ佐々の一家をのせて神戸を出帆した日本郵船株式會社のカトリ丸は七月一日の午前九時ごろにマルセーユへ入港する豫定だつた。マルセーユの驛からホテル・ノアイユへよつて、パリの日本大使館のムシュ・マナガが契約しておいた部屋と云つて一應たしかめておいてから、埠頭へ迎へに行けばよいだらう。増永修三が、マルセーユ行の切符とともに伸子に與へた指圖は、さういふことであつた。

六月三十日の夜七時に、伸子は一人で、ガール・ド・リオンから出發した。どんなあひ客が、いつどこからのつて来るか豫想されない車室のなかに、さし向ひでとちこめられる一等車をさけて、伸子の乗つたのは、日本の汽車のやうな體裁の二等車だつた。

車内は、八分どほりのこみかたで、伸子は二人ならびの

席にひとりでかけられた。伸子は、ウキーンで買つたクリム色の小さい手提鞆を用心ぶかく自分の體と窓の間におき、言葉のよく通じない外國で一人旅する若い女の身のひきしめかたで、座席がきまるとすぐ窓外の景色を眺めはじめた。

南佛に向ふ列車の沿線には、夏の薄明りにつつまれておだやかに耕地がひろがつた。耕地はゆたかに隔々まで愛情をもつて耕作されてゐる。伸子の列車が通過して行く地方には、ポプラが目立つた。薄明の光線を細く鈍く反射させながら流れてゆく小川のふちに、數株のポプラの樹が並んで、年を経て瘤々の太くなつてゐる幹から萌え出た勢ひのいい若枝が、灰色のまざつた軽い淺緑の葉を繁らせてゐる。列車の進行につれて、ゆるく旋回しながら、遠ざかつてゆく野道の上に、ポプラ並木がつづいてゐる。ところどころに散らばつて在る農家は、灰色の外壁に厚い藁葺葺屋根をもつてゐて、家畜小屋や荷車のおかれてゐる内庭は、低い灰色の土の牆で四角くかこまれてゐる。それらの農家は、圓い形の厚い藁葺き屋根と土の牆と、ポプラの樹のかげに、傳統的なフランス農民の生活をつつんでゐるやうだつた。しかし最近の數年間にフランスの農業人口は減りつづけてゐるといふことだつた。政府は、金まはりのいい状態を保ちつづけるために、國內に不足な農業生産物を、やすく植民地からとりあげる政策をとりはじめた。それは植民地の住民から土地を失はせる結果になつてゐてフランス

の共產黨は、攻撃してゐる。伸子は、パリで買へるデイル・メイル紙からさういふ記事をよんで間もなかつた。

艶の消された水色と、灰色がかつて爽やかな緑で調和してゐる風景は、車窓から眺めてゐる伸子にシャブヌの色彩調を思ひ出させた。シャブヌがこのんだ、しづかなその諧調は、かうして旅してみればフランスの自然がその中に生きてゐる色だつた。優雅な、ほとんど清楚と云つていいフランスのこの自然色は服地にもつかはれて、東京にあるフランス人経営の中學校の制服に同じ系統の色が用ひられてゐた。保が、その學校の一年生になつたとき、伸子は、少年の制服のそのしやれたフランスの色をこのもしいと思つて見た。

フランスの自然の主調であるこの色は、またフランス陸軍の色でもあつた。そこでおそらくこの優美な色調は地物の色とよばれ、掩護色と云はれる種類のものでもあるのだらう。

車窓のそとは次第に暗くなつて、やがて一直線にマルセーユに向つて走つてゐる夜行列車の窓ガラスには明るく車内の電燈が映るやうになつた。

ほんたうは、自分一人がこんなにして夜汽車でマルセーユまでうちものたちを迎へに行くやうになるとは、伸子は考へてゐなかつたのだつた。

伸子が素子と暮すやうになつた五年このかた、素子と多計代との間には雙方からの根ぶかい折りあひのわるさがあ

つたから、佐々のものがフランスへ來るからと云つて、伸子は、素子にも迎へに行つてほしいとは誘ひかねた。しかし、素子もマルセーユといふ港町そのものには興味があるかもしれない。もしかしたら、素子らしく、埠頭へ迎へには行かなくても、マルセーユ見物にだけは一日ぐらゐつきあつて伸子とパリを立つ氣があるかもしれない。伸子は、そんなふりに思つてゐた。増永に會つて、七月一日に着く佐々の一行を迎へるうち合はせをしてゐるとき、わきにゐる素子は、マルセーユといふ港町への興味さへも示さなかつた。

「かうやつて、ホテルまで手配してあれば、ぶこちゃん、心配いらななさ」

さう云つたきりだつた。

「マルセーユを見る氣はない？」

「——まあ、親子水いらずの方が無難だらう」

リオン停車場へ送つて來た素子は列車の窓ごしに伸子に向つて云つた。

「せいぜい氣をつけて行つて來なさい」

増永の氣持についても、伸子の思ひちがひがあつた。増永と佐々泰造との親しいつき合ひから、息子修三が、父の親友の一人である泰造のために、マルセーユくらゐまで行くのかもしれないと、伸子は、思つてゐた。ところが増永修三は、伸子のためにマルセーユまでの切符をととのへて届けるといふとき、

「ほんたうは、僕もお出迎へに行かなけりやならないところなんでせうが、手のはなせないことがあるし、御婦人だから、却つてお邪魔だといけませんし……」

とつけ加へ、世間で秀麗と云はれるやうな顔で笑つた。なにげなく禮をのべてあいさつしながら、伸子は、彼の小さい笑ひに傷つけられた。單純に、失禮します、と云はれた方が伸子としてはこころもちがよかつた。フランスで、言葉の自由でない若い伸子に日本の封建的なしきたりを口實に、女だから、男のつれは迷惑だらうといふのは、すぢが通らず、女として侮蔑された感じだつた。伸子が氣づまりでないやうにといふ親切があるなら、別の座席で、伸子に關係なくマルセーユまでゆくこともできないことではないわけだつた。

社交人らしく、自身のスマートさを大切にしてゐるらしい増永とすれば、マルセーユで船からぞろぞろとあがつて来る佐々泰造はいいとして、多計代、和一郎、小枝、つや子といふ一家總勢の姿を想像しただけで、その相伴にあづかるのは氣の毒な自分を感じるのだらう。

佐々の一行が家ちゆうでパリへ来る、といふことのなかには、たしかに、誰の目にも何か度はづれなところがあつた。金もちとも云はれない階級の佐々一家が、何のために家ちゆう、小さい娘までをひきつれて、外國へ来るのか。モスクワでその通知をうけとつたときから、娘の伸子にしろ、こんどの思ひたちのなかにどこことなく自然でないもの

を感じつづけてゐる。パリで、一緒になつてからの生活が思ひやられて、伸子はそれまでに自分と素子とのパリでの暮しの根じろをきめ、ごたついても崩されない自分たちとしての生活感情をとほしておきたいと一ヶ月も前にパリへ来てその準備をして來た。いよいよみんなが七月一日にマルセーユにつくとわかつたとき、伸子は、人知れぬ深い息を胸のなかにためて、そつとそれをきだす思ひだつた。娘である伸子の、それを重荷としてゐることをかくさうとしないそふりは、素子はもとよりのこと、増永修三にも、パリへ來かかつてゐる泰造や多計代を厄介に感じさせるたすけとなつたかもしれないなかつた。

外の景色を眺める氣晴らしさもなくなつた夜行列車のひとすみで、伸子は、はるばる日本から来るうちのものを、かういふ氣分で迎へようとしてゐることをやつぱり悲しく感じた。これには自分の責任もある。伸子はさうも思つた。何がどうであるにしろ、父も母も、うちのものみんなは、パリにゐる伸子といふものを心あてにして四十日の航海をして來てゐるのだつた。あしたはたつた一人で出迎へる自分として、できるだけ賑やかに、みんなを迎へよう。伸子はさう決心した。

翌朝、九時すこし前といふのに、もう暑いマルセーユの波止場で、タクシーからおりたつた伸子の腕には、大きい花束が抱へられてゐた。そのほか、グリーンのリボンでふ

ら下げられてゐる、ふざけた顔つきの青びろうど製のむく犬。同じやうにバラ色のリボンにつられて、薔薇の花びらを重ねたやうに華やかなスカートをふくらませてゐるフランス人形。そんなものが女學生つばい伸子の身のまはりにひきつれられてゐる。埠頭には、船腹に赤錆を出した、見つともない船が一艘横づけになつてゐた。パイプをくはへた波止場人足が多勢、ぶらぶら仕事のはじまるのを待つてゐる。その邊に出迎人らしいものと云へば、ひさしの上に金モールでホテルの名をぬひだした丸形帽をかぶつたホテルの案内人が二三人ゐるぐらゐのものだつた。伸子は、てつきり埠頭がちがふと思つた。そこにはいつてゐる船はどうりみても貨物船だつた。伸子は、萬一さういふことになつてはと思つて、わざわざホテルの帳場へ玄關番をよんで、タクシーの運轉手にカトリ丸の着く埠頭へ行くやうにといふやうにたのませたのに。――

タクシーからおりて、埠頭によごれた小さい船を見たとき、伸子はすぐ、わきにゐたオヴァー・オールのとつた人足に「これ、カトリ？」ときいた。

「ウイ・ウイ」

花だの人形だのを腕からぶら下げた伸子は、まっすぐ船腹の眞下まで行つて、また心配さうに、

「これ、N・Y・Kライン。カトリ？」

ときいた。パイプをくはへた大男の勞働者は、伸子の様子を見おろして、興がつたやうな同情的な笑顔になつた。

「ヴォア・ラ・マドモアゼル。カトリ！」

とまつてゐる船の方へ片手のひらを上むけに大きくふりながら、その上甲板を見上げた。

手ぶりにつれて見上げると甲板と甲板との間にはさまれたやうに馴れない目に見わけのつかない、いくつもの顔が並んで、波止場を見おろしてゐる。

伸子は、その人の姿の間に、日本服を着た女の上半身を認めたやうに思つた。それは、多計代でも、小枝でもない、別の日本の女のひとだつた。しかしそれで元氣を得た伸子は、一心に首をもたげて、横歩きしながら上甲板の端から見えてゐる一つ一つの顔をしらべて行つた。あるところへ來たとき、いきなり伸子は全身で爪立つて、花東を大きく左から右へ、右から左へとふりはじめた。父の泰造が見つかつたのだつた。つづいて、つや子がわかつた。小枝もゐる。母が見えた。そして、和一郎も。

船の上でも、まばらな波止場人足の間にぼつちりと一人まじつて、花東をふつてゐる伸子を見わたらしかつた。そこにざわめきがおこつて、泰造が盛に帽子で台圖をはじめた。つくん、つくん、とび立つやうな子供らしい手のふりかたで、つや子があいさつをよこした。多計代も和服のたもとをひるがへして高く手をあげた。

それにこたへて、伸子は花ばかりでなく、こんどは青い犬ころと人形とを、ゆるく大きく、輪をかくやうにふりまはしはじめた。船の顔々がそれを見おろして笑つてゐるの

がわかつた。伸子も、笑ひながら、
「みんなの顔が見えることよウ」

と叫び、ますます陽氣に、犬ころと人形とをふるのだつたが、さうやつて賑やかに笑つてゐる伸子の眼のなかには涙がにじんだ。

何といふ多計代の變りかただらう。伸子が東京を立つて來たころは、いつもふつさりと結ばれてゐて、多計代らしい派手ごのみだつたひさし髪は、ひきつめられて前がみのほとんどない、髪の中ひぶりにかはつてゐる。白粉こそ刷かれてゐるやうだけれども、黒い陰氣な光線よけレンズに眼はかくされ、さだかでない視線のなかにある伸子に向つて途切れがちに手をふつてゐる肩はやせて、衣紋の正しい夏衣裳は骨だつて見える。

多計代は變つてゐた。その多計代が、インド洋をとほつてフランスまで來た。この事實は、伸子に同情以外のすべての感情を忘れさせた。

伸子は、泣きさうで喉をびくびくふるはしながら、船の上から見てゐる人たちへ向けてゐる顔の笑ひは消すまいと努力して、なほつよく花束や犬ころをふりつづけた。

上甲板に見えてゐた泰造がなくなつたと思つたら、やがて誰もゐない中甲板の手すりのところに彼の姿が再び現れた。近眼の伸子にも、そこまで近づいた父親の顔は手にとるやうに見わけられた。泰造は、帽子をふり、伸子を見、笑つて、そして泣いてゐる。泣いて、笑つてゐるその父の

顔を見たら、伸子は、上甲板に向つて花束や人形をふりながら、足もとがよろつきさうなところの激動を感じた。泰造の表情は、保が死んでからの動坂のうちの生活が、みんなにとつて、どんなものであるかといふことを伸子にさくらせたのだつた。

渡橋のとりつけられるのを待ちかねて、伸子は船へのぼつて行つた。

二

トロカデロの廣場から、トウキオと名づけられてゐるセイヌ河岸へ出る間にあるディエナ通りは、役所町じみたしづけさで、プラタナスの繁つた歩道の左側に、古くさく、イルミネーションつきのホテル・アンテルナショナルの車よせがつき出てゐる。

おそらくこのホテルは、エッフェル塔がトロカデロに建てられた一九〇〇年のパリ大博覽會のころ、各國から集つて來た各種各様の客のために國際といふ名をつけて開業されたにちがひなかつた。ここがパリへ來る日本人の一時の定宿のやうになつて、ホテルの數少い召使たちが、日本の男の浴衣がけの姿にもおどろかないやうな風になつたのは、いつごろからだらう。ホテルに近いセイヌ河岸にトウキオといふ名がついてゐるところをみれば、それはヨロツパ大戦以後のことらしくかつた。ディエナ通りがエッフェル塔とトウキオ河岸の間にあつて、迷子になりにくい

位置だし大使館から遠くない上にシャンゼリゼをふくむグラン・ブルヴァールにも近く、そんな場所に在るにかかはらず氣やすい三流ホテルだといふことから、いつの間にかパリへ来る日本人の一時の定宿のやうになつてしまつたのだらう。

伸子と素子とは、間口ばかりはこけおどしに廣くて、奥ゆきの淺いそのホテルの建物の正面階段を三階へのぼつて行つた。そして、金色のハンドルのついた白塗り兩開きの大扉をノックした。

ドアをあけたのは小枝だつた。帽子をかぶればそれでもういつでもいいだけの外出姿で、しぶい色のバラ模様のジューゼットの服が小枝ののびやかに若々しい體に美しく似合つてゐる。小枝は、

「あら！ お早う！」

うれしさうに伸子の手にはさつた。

「よくこんなに早くいらつしやれてね」

小枝は、すぐそこから奥の寢室に向つて、

「おかあさま。素子さんとお姉さまが、いらつしやいました」

と告げた。つや子が駈けて來た。白いブラウスに草色のスカートをつけて。ふとりすぎた十三歳の少女のつや子は、草色の服はあなかくさかつた。つや子は、だまつて伸子にすがりついた。

「どうしたの？ どつかへお出かけ！」

「わからない」

つや子にからみつかれたまま伸子たちが通りぬけるがらんとした控間のすれた赤いカーベットのの上には、二つの大きい鉾うち航海用トランク、泰造用のインノヴェーション・トランク、そのほか、大トランク、小トランク、荷物の山がある。奥の寢室には、夫婦のための二つの寢臺のほかに、もう一つ、つや子のベッドまで入れてあつて、どの寢臺も起きたままだつた。ひろい部屋ぢゆうは混雜してゐて、引越し最中のやうに落着かなかつた。椅子の上に、多計代の手まはりのスーツ・ケースがふたをあけてのせてあつた。多計代は、ねまきの手綱染めの單衣の上に伊達巻をしめた姿で、化粧臺に背をもたせ、もう一つの椅子に素足の兩足をのせてゐた。泰造は一つのベッドの上にはすにかけ、和一郎は、窓じきりにもたれて、むつつりとした表情である。

三人のそんな様子、小枝のよろこびかた。マルセーユでうちのものと一緒になつてからけふで四日目の伸子には、およそのいきさつが察しられるやうになつた。伸子は、

「お早うございます」

あつさり父親にあいさつして、多計代のそばへよつて行つた。

「いかが？ お眠れになつて？ つかれは？——ゆつくりしてごらんになると、やつぱり相當でせう？」

「ああ、お早う。よく來られたね」

素子に向つて多計代は、

「ごめんかうむりますよ、脚がむくんでしまつて痛いもんだから」

と、椅子に足をのばしてゐる云ひわけをした。

「どうぞ、どうぞ」

多計代は、髪を結つたばかりであるけれども、泰造も和一郎もきちんとした服装だつた。朝飯はすまされ、コーヒ―道具が、壁ぎはのテーブルに片よせてある。

「さて、それぢや伸子も来てくれたから、わたしはそろそろ出かけますよ」

泰造が、さう云つてベッドから立つた。多計代は、椅子の上に足をのばしたまま視線を泰造の動きにからませて、

「あなた、それで、何時ごろお歸りです？」

ときいた。

「早めに歸つていただかなけりや。豊原さんたちのお迎へが何時ごろ来るのか、わたしは何つてゐませんよ」

「大丈夫だ、夕方までには歸ります」

泰造が控間で身じたくして出てゆくと、多計代は、

「さあ、あなたがたも出かけたらいだらう」

不機嫌に窓ぎはに立つてゐる和一郎に云つた。伸子が日本にゐたところの和一郎は、美術學校の最上級生だつた。この春卒業して、父の事務所につとめはじめた。和一郎は、若い良人らしく大人びた和一郎は、純白のカラーの上に、神経質な口元をむすんで、返事しない。

「だれもとめてやしないんだから、出かけたらいぢやないか。小枝さんをごらんなさい。もうさつきからすつかり支度ができて、お待ちかねですよ」

多計代の云ひかたには、小枝のために、伸子を苦しくさせる響きがあつた。きかないふりをしてゐる小枝の、おとなしい顔が、案の定こころもち赧らんだ。小枝は、ちよつと居場所のないやうな身のこなしをしたが、

「おかあさま、お召をそろへませうか」

つとめて、話題をかへるやうに云つた。

「どれをだませう」

「さうねえ、夕方までは、どうせどこへも出ないんだから何でもいゝけれど。――あの裏葉色の裾模様はどこに入れたつけ」

「さあ。――船で召さなかつた新しい方のでせう？」

小枝はこまつたやうに、

「大トランクの方だつたやうに思ひますけれど――見ませう」

大トランクといふのは、控間の方に置いてある銀うちの入れものの方だつた。

伸子は、小枝について控間に出て行つた。そして、正直に自分でトランクの鍵をあけようとする小枝をとめて、大きい聲で、

「和一郎さん、ちよつと来て」

とよんだ。

「鍵がうまくまはらない」

和一郎が来て、トランクの鍵はもとよりすぐあいた。仲子は、多計代にきこえない小聲で和一郎に云つた。

「あなたまで不機嫌にしてゐちゃ、小枝ちゃんはどうしていいかわかりやしないことよ。——出かけなさい。ひきうけるから。——いい？」

和一郎は、

「うん」

と云つた。

「夕方、ちよつとかへつていらつしやいね。そして、おかあさまたちを送り出してから、みんなで夕飯に出かけませう」

「ああ」

「さ、行つた方がいいことよ」

和一郎はそのまま控間から出て自分たちの部屋へ帽子をとりに行つた。しかし、小枝はそれについて一緒に行かうとせず、一人だけのこつて大トランクにかがみこみ、つまれた衣類を一枚一枚丁寧にわきへどけながら、云はれた着物を見つけようとしてゐるのだつた。

「これだけの中を、ほじくりかへすのぢや、とてもだわ。いいわよ、小枝ちゃん、わたしがあとでゆつくり見ておいてあげるから」

小枝の氣づかひがひどくて、仲子は見かねた。同時に、多計代との間にさういふ習慣をつくり出してしまつた和一

郎や小枝その人に對して、はがゆい氣持が湧いても来る。仲子はこつちの部屋から、

「それでいいでせう？」

と寢室の多計代に聲をかけた。

「ついでに、キモノ展覧會をしていただくわ。よくこんなにもつて來られたこと」

そこへ和一郎が帽子をもつて入つて來た。

「そら小枝さん」

こんどは多計代が、和一郎の機嫌をとり結ばうとしてトランクのところにある小枝をせきたてた。

「あなたも早く帽子をかぶつておいでなさいよ。和一郎さんは、もうそれで出られるんだらう？」

「ああ」

「もういいから。——小枝さん」

やつと若い一組が外出した。

多計代は、

「やれ、やれ、相もかはらずひと騒動だ」

と椅子にもたれこんだ。

「小枝さんてひと、ほんとに何をさせてもお姫様のなきなただからねえ」

甲斐性がなくて、ずるずるしてゐるといふわけらしかつた。仲子には、あんなに美しく、樹のぼり上手と云はれてゐた女學生の小枝が、嫁といふ立場では全く自信をなくして、おどおどしてゐる様子ばかり目にはいるのだつた。

ひとやすみしてから、多計代は化粧臺に向きなほつてゆつくり化粧にとりかかった。毛のさをぶつんと短くきつた細筆のさきに桐をやいてこしらへた軽い墨をつけて、兩眉をかはりばんこにもち上げて、口をすばめるやうな表情で鏡を見ながら眉を描く手つき。手鏡を顔ちかくよせて仕上りをしらべるまじめな顔つき。實の娘の伸子の前では、多計代ものんびりと、一人きりのやうに化粧に専念してゐる。伸子も、何年ぶりかで母の化粧するのをわきから見てゐて、その家庭的な情景を珍しく、ある興味をもつて意識するのだつた。

素子はさつきから、ぎごちない空氣のみなぎつてゐる寢室をさけて、控間の露臺に出て行つてゐた。そこからはデイエナ通りを見おろせた。つや子も素子について、そつちにある。

そばでみると、多計代の髪は随分白くなつてゐた。それを、上から黒チックで黒くして、前髪をつまつた束髪に結つてゐるのだつたが、黒チックは多計代の形のいい額の生えぎはをきたなくしてゐるやうだつた。伸子は、

「おかあさま、もしかしたら、そのチックをやめてみたら」と云つた。

「地のまんまの方が立派ぢやないかしら。血色のさえた顔色をしていらつしやるんだから、かへつて引立つと思ふけれど……」

「さあねえ……」

伸子のいふことには賛成できない風で手鏡を見てゐた多計代は、一遍化粧臺の上においた眉筆をまたとりあげた。そして、兩方の眉のはじまりのところを、すこしづつ強く黒くした。さうすると、眉に起筆のアクセントのやうな調子がついて、いはばその不自然さが多計代の若いときからの美貌の特色をはつきりさせるのだつた。

古びた紅いカーベットをしきつめて寢室のごたごたしたなかで化粧する多計代の手もとに氣をとられながら、伸子の心の底は何かの不安——どうかしなければならぬことの豫感にみたされてゐるのだつた。

三

七月の晴れた朝のマルセーユの港で、まだ船からおりずにゐるうちのものの姿を見たとき、特に父の泰造の顔とやつれきつた多計代の様子を見たとき、伸子の心はしめつけられて、ほんとにみんなのために頼りになり、役に立たなければならぬと思つた。みんなの必要が、たとへ伸子としてどう判断されるにしろ、それを批評するよりは實際的に解決してゆく力とならなければならない。それは、この長い旅行をとほして泰造の負擔を軽くすることでもある。伸子はさう決心して、マルセーユのホテル・ノアイユの一晚を、早くから横になつた多計代のベッドのわきにゐて過したのだつた。

その一晚で、佐々の全家族のこんどの旅行のむつかしさ

が、伸子に、はつきり感じられた。伸子をおどろかしたのは、みんなの心もちが、なぜだかひどくひちがつてゐて、それがむつかしく入りこんでゐることだつた。長い長い航海のあげくマルセーユへ上陸したのだから、一家一同くつろいで、しんみりと、この一年半わかれてゐた間におこつたことが話されるだらう。伸子はさう期待した。保のことを話して、多計代はどんなに新しく歎くことだらう。あるひは、伸子をめめるかもしれない。伸子はそれをおそれた。伸ちゃんの顔を見たらもうわたしは動きたくなくなつた、と云はれることさへ想像した。船の上に見た多計代は、そのくらい憔悴せうすいしてゐた。

ホテル・ノアイユへ着いてひと休みし、和一郎と小枝とが自分たちの室へひきとつてゆくと、多計代はそれを待つてゐたやうに、

「お父様、すみませんが、あれを出して下さいまし」

と、泰造に云つた。そんなにいそいで出さなければならぬいあれといふのは何だらう。伸子はさう思つて、泰造が背廣の背中をこちらに向けて、黒皮のポストン・バッグをあけるのを見守つてゐた。泰造は、銀色つばい錦のきれで包まれた小型の壺の形をしたものを両手の間にもつて、そこに立つたまゝ、

「どこへ置かね」

クリーム色のびろうどで張られた長椅子の上にある多計代にきいた。

「さあ」

多計代は港町のホテルらしく華美に飾られてゐる室内を見まはしてゐたが、

「すみませんがそこへ置いて下さいまし」

鏡のついてゐる高い爐棚の前をさした。それは、多計代がその上に半ば横になつてゐる長椅子の後方だつた。泰造は、多計代のたのみのままに、銀色の錦の包みものを両手で、恭々しくそこにのせた。

伸子は、唇の色が變つてゆくやうな氣持になつた。それは保だといふことがわかつたのだつた。その銀色の錦のきれにつつまれた小箱は保の一部分なのだ。思ひがけない衝撃で、伸子は、かけてゐる椅子の上で體ぢゆうがこはばつた。そして目の中に、苦い汁が湧いた。伸子の心に保は生きてゐる。——死んでしまつたいたいといふ保として、生きてゐる保よりなほ哀切に生きてゐる。八月一日といふ日は、伸子にとつて、いままなほ平靜に感じることもきくこともできにくい日づけである。日本から來たうちのものみんなの心の中に保もはいつて來てあると思へばこそ、伸子はその心と結びつかうとする自分を實感し、それに對して誠實であらうとしてゐるのだつた。

痛切に愛してゐるものが、どうして、その愛するものの骨をもち歩くことに耐へるだらう。保に關するちよつとしたヒントにさへ、ほとんど肉體的な鮮やかさで死んでも生きてゐる保を感じて、さむけだつやうな伸子に、ホテルの

爐棚の上の骨箱との對面は、あんまりだつた。伸子は、暗い刺すやうな視線でその錦の箱を見すゑたまま、息をつめ顔をこはばらしたまま聲も立てなかつた。伸子は、マルセーユのホテルでひとことの前おきなしに保の骨を出しかけられやうとは考へてもゐなかつた。

多計代は口をきかない。泰造もだまつてゐる。ものを云へず、體もうごかせないやうになつた娘の自分を見つめてふた親が沈黙してゐるといふことにさへ、伸子は、しばらく氣づかなかつた。我にかへつて、その異様な雰圍氣をさとり、それが、多計代にどううけとられてゐるかを直感したとき、伸子は兩手で顔をおほひたかつた。

多計代は、伸子をためしただつた。伸子は、はつきりさう感じた。錦のつつみものが保だとさつたとき、伸子はそれにすがつて泣きでもするだらうか。あるひは椅子から立つてお辭儀でもするだらうか。さうならば、それは多計代に伸子のやさしさが示されたことであつた。だが伸子は涙をこぼさず、ただ蒼さめて、こはいこはい顔つきになつたばかりだつた。そして、それについて、ふた親の方から何も云はないとほり、伸子も何も云はない。多計代は、伸子のうけた衝撃について、全く理解しないのだつた。伸子に、錦のつつみものの内容が、どんな苦痛を與へたか。多計代はそれを理解しなかつたばかりでなく、期待したやうな表現で愁歎を示さない伸子を、やつぱり冷酷な娘と思つたことが伸子に、ひしひしとわかつた。冷酷な姉になん

か保は頭を下げてもらふに及ばないのだ。伸子は、多計代の眼のなかに、言葉となつてさう光つてゐる光をよみつた。一層伸子を苦しい思ひにさせたのは、その瞬間の反撥の火花のなかで、多計代の結論が目に見えることだつた。多計代の考へかたは、きまつてゐた。ロシア——ボルシェヴィキ——伸子の思想——と。多計代は、突如にそれを口に出して議論するだけままとまつた反撥のよりどころを伸子に對してもつてゐるわけではないのだつた。

錦のつつみもの、そのものから直接にうけた衝撃と、それをきつかけにはたらいだ多計代の態度への苦しさとは加はつて、伸子はかたくなな心になつた。保へのいとしさから、伸子がそつと錦のつつみの上に手を置くことがあるとすれば、それは誰もゐないとき、誰も見ないとき、さういふときだけされることなのだつた。

和一郎と小枝にくつついて行つてゐたつや子が、室へもどつて來た。ドアを入りしな、つや子は素早い視線を燐燐棚へ向けた。そして、そこにせられてゐるものを見ると、強ひてそれを見なかつたやうな、そんな表情を少女の顔の上に浮べた。

伸子は感じるのだつた。この様子でみればつや子も、おそらくは和一郎も小枝も、心のなかではこの錦の包みものを重荷として感じてゐるのだ、と。泰造さへ、あるひは、かういふ形で保をつれまはることを、多計代の満足のためだけにうけ入れてゐるのかもしれないなかつた。多計代をのぞ